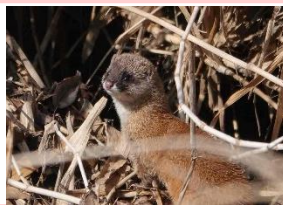


粕谷和夫の観察日記より。3月7日、八王子・湯殿川の野鳥定期カウント、前日配信したクイナがいた場所のさらに上流のヒクイナが出そうな場所で眼をこらして探すとイタチが出てきました。ヒクイナがイタチに食べられなければと心配です。

紅葉台



新聞

第234号

2026年

5月16日

発行人：関谷 孝

陸生ホタルの研究 小俣軍平さん



ホタルという川面を飛び交うゲンジボタル・ヘイケボタルが有名です。小俣さんは、「陸生ホタル生態研究会・多摩里山動植物研究調査会の事務局長」として今年で18年になります。御年95歳。八王子・日野カワセミ会の粕谷会長にとっても「小俣さんは私の師」と尊敬されています。（陸生ホタルは、森林などに生息している蛍のことを言います）

小俣さんは、豊饒としてしっかりと話されます。長年教師をされ、環境問題を研究してこられた飽くなき探求心と強い信念をもって生きてこられました。その姿勢にとても感動しました。（写真中央 小俣軍平さん）

小俣さんの半生は素晴らしい恩師との出会いにあります。（ここでは小俣さん自身の話によりますので言葉は、そのまま掲載します）山梨県大月市の貧しい農家に生まれ、9人兄弟の9番目。（男3人、女6人）働きながら夜間の定時制高校に通いました。忘れもしない1953年2月10日。恩師の井上考道先生から速達が送られてきました。当時山梨県では小学校の教員が少ないため高校出て1年間の県立臨時教員養成所で学習し、教員免許がとれました。私の場合は、先生が代筆で受験票を取ってくださって申し込み、7倍の倍率の中合格しました。

これが人生の大きな転換点になりました。その後、向原校長先生、山梨大学の白井尚先生、東京大学教授宮坂哲史先生等と出会い、教育科学や全生研、日本作文の会に参加しました。

教師6年目に上野原に下宿、月2回お茶の水の明治図書（教育関係の本を出版）に本の編集に行きましたが、帰りは夜中1時の新宿発の夜行列車。流石に大変なので東京の学校に試験を受けなおし、転勤しました。

当時八王子市は人口爆発で市内の丘陵部の70%が宅地開発で失われました。1975年には1年間で小中学校が11校も新設開校しました。そんな状況下で1963年八王子市の第7小学校に赴任。浅川、大栗川、谷地川は生活排水の流入による汚濁でゲンジボタルがほぼ消滅しました。そのため環境教育問題への関心が高まり市民運動が盛り上がりました。その象徴がゲンジボタル。「野川はたるとる村」が小金井市に生まれ、「東京ホタル会議」が結成され、ホタルの保護運動が始まります。

小俣さんは浅川の支流の水田を埋め立て建設された山田小学校に赴任し、「環境教育」に取り組みます。校地

内に**教職員・子ども・地域住民有志の手作業で植物園を造りました。井戸水をくみ上げ水車小屋を作り、循環型のホタル用水路を作りました。**ゲンジボタルの幼虫は、多摩動物公園昆虫館（園の矢島稔先生）から。飼育は萩野昭先生から指導を受けます。それがホタル研究の始まりでした。



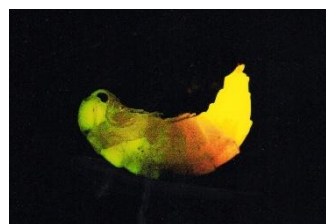
その後も共立女子高等学校・創価大学にゲンジボタルの飼育施設を作り35年以上もホタルが飛んでいます。これは凄いことです。高尾山登山鉄道の清滝駅の近くにゲンジボタルの飼育施設を作りました。しかし、肉食のトビケラがカワニナを食べつくしてしまいました。

自然淘汰では多様性が保たれるのですが、人間のエゴでホタルだけ保護は許されないという教訓を得ました。また、法政大学多摩キャンパスでも西型のゲンジボタルを貯水池に放したのですが、2011年に消滅してしまいました。

1980年代、「**八王子みなみ野開発**」は地元からのゲンジボタル保全要望に応じて開発の見返りとして、里山の原風景のような棚田を造園業者が作りました。当時は環境保全のモデル事業として全国から見学者が訪れました。しかし、ゲンジボタル、ヘイケボタル、スジグロボタルは残っているようですが、今は崩壊して消滅しています。

ホタルの施設づくりは失敗もありました。小俣さん達は「手軽にゲンジボタルの卵が大量に手に入る」ことを知ります。市内の商業施設で毎年ホタル祭りがあります。そのため県外から航空便で送られてくるホタルの容器の中に大量にホタルの卵が産み付けられていました。無償で分けてもらえるので孵化した幼虫を市内の川に放流しました。当時はゲンジボタルには遺伝子の上で西型、東型があることに気が付かずにはいました。**見分け方は2秒点滅が西。4秒点滅が東。発光が長いほうが東になります。**そのため西と東のホタルが混在してしまいました。

現在八王子市では10種類のホタルの生息が確認されています。小俣さんのこれからの夢は、「八王子市の川を昔の川に戻したい」「木下沢の源流には八王子のホタルがまだ生息している」と話していました。



今までのホタルの生態研究の中で大きな発見は、**ヒメホタルのさなぎが七色の光でお尻だけでなく、全身が光っているのを発見したことです。**多摩市在住の絵本作家の皆越ようせい様がこれを見事に撮

影してくれました。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。

粕谷和夫の観察日記より。3月7日、八王子・湯殿川の野鳥定期カウント、前日配信したクイナがいた場所のさらに上流のヒクイナが出そうな場所で眼をこらして探すとイタチが出てきました。ヒクイナがイタチに食べられなければと心配です。



次に岩手県二戸市で発見したクロマドボタルの幼虫です。悲しい歴史の中こんなふうの写真に撮ることが出来たのは珍しいとのことです。

小侯さんから大変印象深い話も聞きました。お兄さんが13歳の時、満州開拓義勇軍として中国東北部へ農業移民として送り出されました。この頃は学校に募集割り当てがあり、山梨県からもたくさんの方が中国へ渡りました。敗戦後、命からがら日本へと逃げ帰ることになります。ソ連軍によりシベリアへ汽車で連れていかれる途中、列車が川へさしかかった時に川へ飛び込みました。その後大変な苦勞をし、6年後の昭和26年日本へ帰ってきました。壮絶な戦争体験は暗く厳しい表情の兄になってしまったといいます。兄は電気溶接の仕事を半年かけて習得し、もう日本にいるのは嫌だとスウェーデンの造船所に働きに行きました。生涯日本には戻らず、各国を転生し腕1本で生きてきたといいます。

その**壮絶な3歳上の兄の戦争体験が小侯さんの心に深く刻まれています**。日本史の教材にお兄さんの戦争体験を取り上げ発表したところ大変関心を持っていただき、たくさんの先生方が教材として使いました。戦争は本当に恐ろしい、絶対やってはいけないと言う気持ちが今でもしっかりと心に刻まれています。

小侯さんは八王子の街を愛し、ホタルを愛し、生き物を愛する気持ちが平和へつながっていくと願っています。ここに書ききれないほどたくさんのお話を聞き圧倒される思いでした。これからもお元気でホタルの研究をされることでしょうか。皆さんもホタルを見つけたら、西型か東型か調べてみてください。(小侯さんはめじろ台在住)



資料・写真は、小侯軍平さん提供

粕谷和夫の観察日記



平塚田んぼはタゲリ、ケリ、シギ、猛禽類などの野鳥の観察スポットです。3月11日、久しぶりにこの田んぼの中を歩いて見ました。東海道新幹線が次々に通過します。タゲリ、ケリの姿はなかったが、ヒバリがさえずりながら高く飛翔する姿を何回も観察できました。**スズメ集団が休耕田のヨシハラ**に集まっていて、とても可愛かったです。



3月9日に湯殿川で死んだ魚を食べるクイナをこのラインで配信しました。この写真は3月11日、平塚の田んぼに行った時、田んぼの横を流れている鈴川で撮ったものです。菜の花の後ろとコンクリートブロックの間を見え隠れしていたため、見つけるのが困難で、探鳥会参加者18名全員が確認するまでに時間がかかりました。**希少なクイナ**に出会うとラッキーな気持ちになります。



昨年12月16日に八王子・清水入緑地のサンシュユの赤い実をラインにアップしました。3月13日同じ木の**サンシュユ**が花を咲かせていました。春は桜に先立ちマンサク、キブシ、レンギョウなど黄色い花の木が多いですね。サンシュユの花言葉は「持続」「耐久」「強健」「気丈な愛」だそうです。この花は長く咲いていて、まさに花言葉のとおり、この花から「力」をもらいましょう。



3月13日、八王子・長池公園の湿地での出合。**アオジのオス**です。眼とくちばしの間が黒いのがオスの特徴です。余程腹をすかしていたのか、2mの近さでも逃げ去りませんでした。胸から腹の黄色が鮮やか、目の前が一瞬明るくなった感じがしました。



自宅庭の通りに面した所に植木鉢で咲いた花を置いて通行する人に楽しんでもらっています。この写真には写っていませんが、**スイセン**の隣りにはストック、サクラソウも咲いています。この花たちが終わるとニチニチソウやマツバボタンにバトンタッチします。

八王子・宇津貫緑地の雑木林の管理作業を手伝いました。雑木林は放っておくと篠竹(アズマネザサ)が伸び放題になってカタクリやキンランなどの野草が花を咲かせることができなくなってしまいます。この写真は**篠竹刈の作業中の一コマ**です。作業終了後にこの雑木林の隣りの林内でカタクリやアズマイチゲの花を楽しみました。その写真は明日、アップします。

